

みえる音楽 きこえる絵本 ～ようこそ《ピーターと狼》の世界へ～

提案者 塚本 靖則

提案者の主張

呼び起こされたイメージや感情は、言葉や身体による多様な表現を介することで個の材への理解を深め、そして他者と共有されるものとなる。

単元において願う個の姿 ～3つのかかわりに着目して描く～

本単元を通して、研究主題「材と向き合い続ける個」へ迫るために、「材とのかかわりの中で多様に表現することを通して音楽の理解を深め、他者とのかかわりの中で自らの考えや価値観を更新する個の姿」を願う。単元を通して、個が音楽を聴いて想起したイメージや感情を大切に、材とかかわり続け、他者の考えや価値観にもふれる経験、また、多様な表現が認められるあたたかな学びの風土の中で、子どもたちから生まれた問いに探究的にアプローチする過程を重視する。本単元で扱う材「交響的物語《ピーターと狼》」は、ロシア民話をもとにした子どもにも親しみのある物語をもち、その登場人物を表現する楽器と演奏されるモチーフが特徴的である。個は、材と出合い、音楽からイメージや感情を感じ取る中で音色や旋律を聞き取っていく。音楽から“感受”したことを、言葉や絵・図、身体の動きなどによる多様な表現を介して、他者と共有していく。このような活動の中で、子どもたちから生まれた問いは、材の本質的な価値を“追求”するものである。材の価値に迫っていく過程で、音楽のよさや面白さ、美しさについて“追求”を深め、自分の感じ方や捉え方、そして自分にとっての価値について“省察”することをめざしていく【個と材とのかかわり】。その際、ともに音楽を鑑賞し、表現する他者の存在は不可欠である。「固有の他者とのかかわり」において、自己と他者の感受・表現をかかわらせながら、音楽の感じ方や捉え方、それに対する考えや価値観が多様であることに気づき、音楽のよさや面白さに迫っていく。他者との対話や表現の認め合いなどの“協働”を通して、同じ音楽から感じ取ったイメージや感情、想像が一人ひとり異なることに気づき、その違いを認め、尊重する態度を育みたい。子どもたちは、自分の考えとは異なる固有の他者とのかかわりの中で、自分にはなかった音楽への感じ方や捉え方、考えや価値を“感受”する【個と固有の他者とのかかわり】。そして、本単元における鑑賞と表現の往還を通して、一人ひとりが音楽のよさや面白さ、美しさに気づき、あたたかな学びの風土の中で多様な表現を認め合い、さらなる学びへとつなげていくことを期待する【個と学びの風土とのかかわり】。

現在地 ～個から現在の学びのありようを描く～

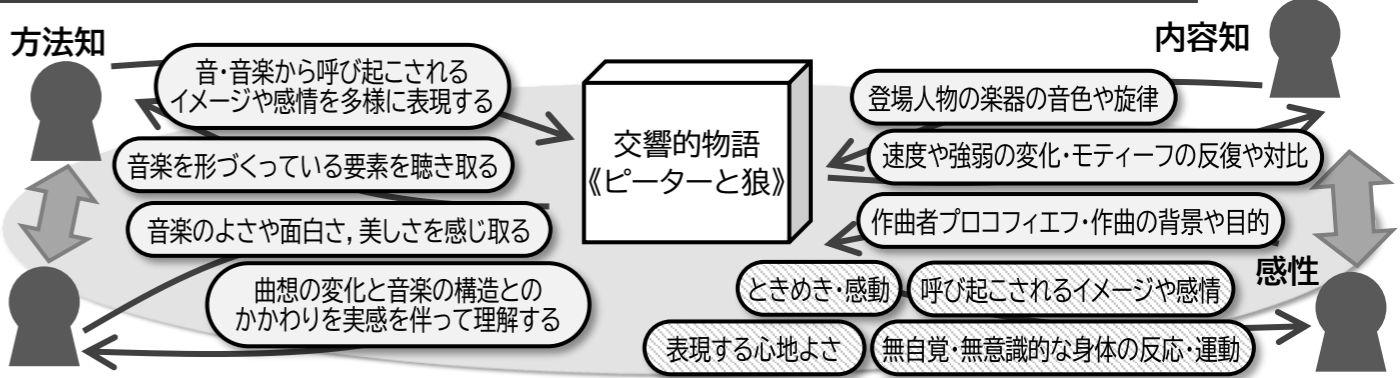
A ◇自分を信じて突き進む A さん “芯の強さ”をもちながらも 考えや学びを広げる “しなやかさ”をめざして
まっすぐ学びに向かう A さんは、いつも自分の考えをもち、授業が終わるとすぐに次の授業に向けて動き出すことがある。オリジナル影絵劇に取り組んでいる本学級の総合単元学習の時間では、いつも前に出て、考えてきたことや準備してきたことをもとに、学級全体を力強く引っ張っていくと訴えかけるように話している。また、学年集会では、ツバメプロジェクトの立ち上げのきっかけをつくり、学年全員を前にたつ一人で司会を務めた。芯の強さをもつ A さんは、自分を信じて突き進むことができる。しかし、裏を返せば自分を信じて疑われない一面として捉えることができ、他者の考えに心を寄せることができず、考えや学びを広げられない場面を幾度も見てきた。幼少期からピアノを習っている A さんにとって音楽の強弱記号は、曲の盛り上がりを表す絶対的な指標であり、その強弱記号のよさについて訴えるも、友達にとっては「よく分からない」ものであった。必死に伝えようとするも、うまく伝わらない。そんな場面に彼ももどかしさを感じていただろう。そのうまく伝わらない“もどかしさ”に立ち止まってほしい。そんな A さんの力強さが学級全体へ波及するとともに、A さんの考えや価値観が他者とのかかわりの中で、芯の強さをもちながらも、しなやかになることをめざしたい。音楽から呼び起こされたイメージや感情、想像を多様に表現する本単元において、A さんが他者とのかかわりから、気づきや学びを広げる姿に期待している。

材の分析① 材「交響的物語《ピーターと狼》」～材のもつ固有性や材を通した学びにおける個の変容を描く～

交響的物語《ピーターと狼》は、ロシアの作曲家セルゲイ・プロコフィエフが作曲した朗読とオーケストラによって演奏される子どものための作品である。モスクワ児童劇場の芸術監督であるナターリア・サーツによる依頼から子どもにオーケストラを紹介するための言葉のある交響曲となった。物語の登場人物・動物たちには、それぞれがオーケストラの特定の楽器によって演奏され、それぞれ固有の主題が割り当てられており、ライトモチーフとして扱われている。少年ピーターは弦楽器、木々に囀る小鳥たちはフルート、池で泳ぐアヒルはオーボエ、そこへやってきた猫はクラリネット。小言の多いピーターのおじいさんはファゴット。恐ろしい狼は三本のホルン、狩人たちはティンパニで表現される。このように交響的物語《ピーターと狼》の魅力は、登場人物と楽器の音色がモチーフとして結びついていることである。これらの楽器がどのような音色をもち、どのように登場人物の性格や感情を表現できるかを、音楽と物語とを結びつけながら鑑賞することができるのだ。たとえば、小鳥の軽やかなフルートとアヒルののんびりしたオーボエが対話する場面では、旋律や音色の対比が物語のやり取りを生き生きと表している。また、狼の登場ではホルンの不気味な響き加わり、速度や強弱の変化によって緊張感が高まる。このように、曲想の変化は速度や強弱の変化、モチーフの反復や対比などの音楽の構造と深くかかわっており、物語の展開を音楽で感じ取ることができる。

本単元では、オーケストラの音楽を学ぶ子ども向けの材として最適な《ピーターと狼》の魅力を生かし、音や音楽から呼び起こされるイメージや感情をもとに想像をふくらませ、言葉や絵で表現したり、音楽に合わせて身体で表現したりする活動をくり返すことで、子どもたち一人ひとりが実感を伴った音楽への理解を深めることをめざす。このような鑑賞と表現の活動を往還することで、個は音楽の登場人物を表す楽器の音色や旋律を聞き取り、モチーフの反復や対比、強弱や速度の変化といった音楽の構造とのかかわりを感性でとらえ、意味を見いだすようになる。そして、他者の表現や考えにふれることで、自分にはなかった考えや価値観に出合い、音楽のよさや面白さ、美しさを捉え直そうとする姿を期待している。自分の思いや考えをしっかりともち、それを多様に表現するとともに、他者の表現を受け止め、認めようとする子どもたちの姿をめざしたい。

材の分析② 材「交響的物語《ピーターと狼》」～材固有の学びの可能性を分析する～



単元の履歴 ～本単元の個の学びと構築される価値や概念を描く～

単元目標	知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力、人間性等
	《ピーターと狼》の登場人物の楽器の音色や旋律を聞き取り、モチーフの反復や対比、速度や強弱などの曲想やその変化と音楽の構造とのかかわりについて気づいている。	《ピーターと狼》のそれぞれの登場人物を表現する楽器の音色や旋律が生み出すよさやおもしろさ、美しさを感じ取りながら、聞き取ったことと感じ取ったことのかかわりについて考え、自分のイメージや感情を言葉や絵・図、身体の動きなど多様に表現する活動を通して、曲全体を味わって聴いている。	《ピーターと狼》から呼び起こされるイメージや感情をもとに想像をふくらませる活動や言葉や図・絵、身体の動きなど多様に表現する活動を楽しみながら、自分にとっての音楽の価値を見だし、また、友達の考えを認めようとして、友達の考えから自身の価値観を更新したりしている。

1～2 心と身体で感じ取って「ピーターと狼」を感じ取って聴こう

1・2 音楽(1～4の場面・5～8の場面)を聴き、イメージや感情を感じ取ったり、形づくっている要素を聞き取ったりする。

A フルートやチェロの音が聴こえる。最初は舞踏会のイメージ。途中何が近づいてきた!不気味…。

B 2の場面のフルートは音が高い。息を吹いて音を出す楽器が多い。4の場面、のどか→危険→平和!

C 途中で鳥が出てくる。4の場面は森の音楽みたい。5の場面ですごい獣が出てくるよ。くまかな!?

B 1と6の場面、5と7の場面が似ている、同じ楽器がくり返し出てくる。お話みたいになっている。

この曲、なんだかお話みたいになっているね!森の中やお城に鳥や猫、偉そうな王様が出てくるんじゃないかな。

3 楽器の音色に焦点を当て、それぞれの登場人物に固有のモチーフがあることに気づき、想像を膨らませながら聞く。

A 楽器を演奏している人が気になる。8の場面の狼は、世界が終わりそうな感じ…。

B さびしそうなアヒルだね。猫は散歩していて、えさを見つけて追いかけていく。狼もえさを探している。

C 男の子は優しくてのんびり。小鳥は元気いっぱいピョ。アヒルはのんびり。猫はお散歩。おじいさんは怖い。狼はくくん。

4・5 音楽(8～12の場面)を鑑賞し、体を動かしたり、お話の場面や出てくる登場人物の様子を想像したりしながら聴く。

A 8の場面は世界が消滅してしまう感じ。21さんと一緒に12の場面には、フルートとクラリネットの音が出てきていると思うんだ。

B 狼の登場、音楽は暗い。狼が必死にえさを探している?その後猫?が出てくる。音の音が高いし、速い。フルートも聞こえる?

C 8の場面は暗い怖い。9の場面、マリオみたいな音がする!!11の場面はゆっくり。ナマケモノかな。12の場面、どん!って音がある!

6 音楽(8～12の場面)を鑑賞し、狼やアヒル、小鳥、猫などの動物たちの様子を想像しながら聴く。(本時)

A 11の場面は、お葬式みたいで不気味。10の場面の最後に大騒ぎがある!!何かがやられちゃうみたい!

B 10の場面の動物が分からないんだよね。音がオーボエ?だからアヒルなのか?ってことはアヒルが…。

C 12の場面の「どんどん!」って音が気になるなあ。大砲みたいな音。猫と小鳥が撃たれちゃうのかな?

7 語り付きの『ピーターと狼』を聴いたり、音楽がもたらした映画を見たりすることで、聴き方と作品への理解を深める。

A アヒルくん、生きてよかった!ふう〜!ナレーターの読み方は、読み聞かせをしている!?すごく面白かった!

B アヒルが丸飲みしてくれた狼のおかげで、アヒルは生きてよかった。

C 狼をたおせてよかった。つかまえた狼は動物園に連れて行かれるんだね。めでたし、めでたし。

D 音楽だけでも面白いんだけど、ナレーションがあるともっと面白くて、頭の中で映像が流れた!

まず題名を伝えず、音楽そのものを感じ取れるようにした。耳を澄ませて聴く子、音楽に合わせて身体を動かす子、友達の動きを見ながら聴く子などがいた。楽器の音色や反復に気付けるように、場面に分けて鑑賞した。言葉や絵など多様な表現を認めながら、感じ取ったことや気付いたことを伝え合う活動を進めていった。

音楽にくり返し登場する楽器と固有のモチーフを登場人物と結びつけて聴いた。このとき、子どもに物語の内容について話さず、音楽からどのような登場人物・動物なのか、その様子について想像を膨らませて聴いた。

子どもの関心が高い狼が登場する8の場面から12の場面までを続けて鑑賞した。音楽の経過を表すタイムバーを活用して、場面の移り変わりや音楽の構造を捉えられるようにした。

8～12の場面で、前時に明らかにならなかった10の場面は焦点を当て、楽器の音色と登場する動物について聞き深めていく。友達の気づきを自分の考えや聴き方につなげられるようにした。

作曲家や題名、作曲の背景について伝え、語り付きの音楽を聴いたり、映画を見たりして、音楽と物語に没入できるようにした。これまでの学びをふり返り、音楽による表現について考えられるようにした。

みえる音楽 きこえる絵本 ～ようこそ《ピーターと狼》の世界へ～

12月12日(金) 9:30～10:15

本時のねらい

《ピーターと狼》の8～12の場面の音楽に合わせて体を動かしたり、聴き比べたりする活動の中で、登場人物を表す楽器の音色を聴き取ったり、速度や強弱の変化を捉えたりすることで、呼び起された感情やイメージ、想像したことと結びつけて聴き味わうことができる。

現在地 ～本時までの個の学びを描く～

A ◇喚起されたイメージや感情、捉えた音楽を形づくっている要素から自分なりの想像を膨らませる A さん
いつも自分なりの考えをもち、それを学級全体に発表したり、全体の学びの方向性を指し示したりする A さん。オリジナル影絵劇に取り組んでいる本学級の総合単元学習では、“総合の時間をつくる”プロジェクトのメンバーの一人として活躍している。そんな A さんは、幼いころからピアノを習っており、音楽の知識や経験が豊富である。また、お茶目で明るい性格の A さんは、音楽が流れるとすぐに立ち上がり、音楽に合わせて体を動かすこともできる。

第1時で初めて《ピーターと狼》を聴いた時には、しばらく音楽に耳を澄ませたあと、立ち上がって体を動かす始めた。A さんの身体表現は、いつも音楽を形づくっている要素を捉えており、速度や強弱、拍を感じ取って体を動かしている。また、場面で分けた音楽を鑑賞し、ワークシートに記入した際には、1の場面を「舞踏会・パーティ」、「優しいメロディ」と感じ取ったことから想像を膨らませ、また、2の場面では「フルートの音⇄細かい音階⇄16分音符」と聴き取ったことと自分の知識とを結びつけ、言葉で表現していた。第6時では、8の場面を鑑賞し、狼を表すホルンの音色とモチーフから「平和な世界が消滅する」とイメージを膨らませた。それぞれの楽器の音色が登場人物を表していることと理解してはいるものの、自分の想像の世界のイメージが強く、友達にとっては共感することが難しい内容である。本時では、自分なりの考えや発表を大切にしながらも、A さんが他者の考えにふれ、自らの考えや価値観を更新する瞬間をつくりたい。

C ◇音楽に感性をはたらかせ 短い言葉やオノマトペ、絵や図、体の動きで豊かに表現する C さん
音楽が流れるとすぐに立ち上がり、音楽から呼び起されたイメージや感情、それらをもとにした想像から体を動かすことができる C さん。すなおな性格で自分らしさを大切にしている C さんの身体表現は、いつも友達に開かれており、学級の友達から認められているほどである。一方で、C さんは自分の考えや思いを上手に言葉で表現できないことがある。うまく言葉で言い表すことができないことで、C さんの伝えたいことが友達から理解されないことがあったり、C さんに心を寄せようとする姿勢が見られない子どもがいたりする現状がある。

本単元では、自分の感じたことや捉えたことを、体の動きはもちろん、短い言葉やオノマトペ、絵や図など多様に表現する姿が見られた。第1時で1～5の場面を聴いたとき、1の場面では「高い音(強い音)」、「けっこう高い(強い)」とイメージがわからない様子であったが、聴き進めていくことで4の場面では、「森の音楽」、5の場面では「低いくまさん」と想像を膨らませ、《ピーターと狼》のお話に引き込まれていった。第3時に、それぞれの楽器の音色とモチーフが登場人物が表現されていることを知ると、フルートの音色から鳥のように元気いっぱい腕を羽ばたいて見せたり、ホルンの音色から狼のように四足歩行をし、時折遠吠えをするような動作をしたりと楽器の音色と動物のイメージが結びついていることが分かる。さらに、音楽の細かな変化を見逃さず、12の場面でも聴こえるティンパニの音を聴き取り、「どんどんって音がする。大砲かな?銃かな?」と猫と小鳥が木の上に乗るも、狼がまた木の下で待ち構えている緊迫感を感じ取っていた。C さんの表現を生かし、学級全体で学びを広げていきたい。

意図 ～本時に向けた教師の意図や願いを描く～

本単元では、子どもたちが交響的物語《ピーターと狼》と出会うことをきっかけに、音楽から呼び起されるイメージや感情を大切にしながら学習を進めてきた。題名を伏せて鑑賞することで、子どもたちは「なんだか動物が出てきそう」、「同じ音楽がくり返している」など、音楽から感じ取ったことを言葉や絵、身体の動きなどで表現し、音楽に親しむ姿が見られた。音楽に合わせて身体を動かすことそのものに心地よさを感じる子、耳を澄ませて音楽の細部まで聴き取ろうとする子、友達の動きを見ながらイメージを広げる子など多様な表現があふれ、そこに音楽を介した個の感じ方や捉え方の共有が生まれていた。こうした活動を重ねる中で、子どもたちは音楽を形づくっている要素や音楽の構造に目を向けていった。登場人物を表す楽器の音色と固有のモチーフを聴き取り、音色や旋律の違い、くり返し登場する音楽の構造に気付くことで、「この曲はお話みたいになっている」という発言が見られた。さらに、狼が登場する場面(8の場面)からアヒルが狼から必死に逃げるも、飲み込まれてしまう場面(10～11の場面)、そして猫と小鳥が木の上で怯えている場面(12の場面)にかけて、劇的に速度や強弱が変化し、音楽の緊張感が高まる。この子どもたちの心が大きく揺れ動く場面をくり返し聴く中で、感じ取ったことや聴き取ったことを身体で捉えたり、言葉や絵などで表現したりする姿が見られた。

本時では、狼が登場してからアヒルが飲み込まれ、猫と小鳥が木の上で怯えるまでの8から12までの場面を聴き深める。音楽をくり返し聴き、音色・速度・強弱などの音楽を形づくっている要素に着目しながら、場面の移り変わりや登場人物の様子を想像し、感じ取ったことや聴き取ったことを言葉や身体の動きで表現する活動を行う。前時である第5時間目では、8の場面について「狼が登場する」、「えさを探している」とホルンの音色から想像を膨らませていた。また、9の場面では、「猫が出てくる。でもいつもとちがう」、「すこし速い気がする」とクラリネットの音色を捉えつつも、速度の変化をしっかりと捉えていた子どもたち。さらに、11の場面では、オーボエの音色と強弱、その変化から「アヒルかな?」、「なんだかお葬式みたい。不気味」、12の場面では、クラリネットとフルートの音を聴き取り、「猫がまた出てきた」、「フルートの音も聞こえるから小鳥もいる」と登場人物を捉え、想像を膨らませていた。しかし、10の場面については、「あまり楽器の音がよく分からない」、「10の動物はなんだろう?」と明らかになっていないことが多い。そこで、オーボエの音色や旋律の変化、強弱の変化に着目し、アヒルが必死に逃げる様子や飲み込まれた後の悲しみを音楽から感じ取り、音楽が表す場面の意味を想像できるようにしたい。タイムバーを活用し、場面の移り変わりを視覚化することで、音楽の構造と物語の展開を関連づけ、音楽をくり返し聴くことで実感を持った理解をめざしていく。子どもたちが自分の感じ方を言葉や体の動きで表し、友達の表現を受け止める中で、音楽のよさや面白さを多様な視点から捉え直し、考えや価値観を更新する学びの広がりを生み出したい。

本時の学び ～“かかわり”から生まれる個の学びの姿を描く～

《ピーターと狼》の8場面～を感じ取って聴く

A 8の場面は狼が姿勢を低くして獲物をねらっているよ。こっそり背後から近づいていって…。

C 9の場面は、猫がお散歩のこのこ歩いているよ。でもなんだか急ぎ足。焦っている感じ。11はアヒルだから、手をくちばしにしてぐわぐわ。

8の場面からの音楽を聴いて 登場する動物の様子を想像しよう



E 8の場面は、狼がしげみから出てくる感じがする。

F 8の場面の狼は、崖から獲物を狙っているような感じがしたよ。

G 11の場面は、悲しそうな感じがする。かわいそう。

H 12の場面は、猫がのんきに散歩しているのかなって。でもそれをねらっているんだと思う。

A 21さんが言っていたように、12の場面はクラリネットとフルートの音が聞こえる。10の場面のところは、追いかけているんじゃないかな。

B 8は狼、9は猫、11はアヒル、12は猫と小鳥が登場するっていうのは分かっていたんだけど、10の場面の動物が全くわからないんだよ。

10の場面のハプニング! なにが起こったの!?
おそったのは...おそわれたのは...そしてお話は...

J 10の場面のハプニングは、音が高いんだよね。それがハプニングを表している。

L 10の場面、天国にいたんだけどつかまってしまって、地獄に落ちるような感じがする。

K 10の場面の最後、ハプニングのところで逃げてるのはアヒルなんじゃないかな。

M 11の場面は、倒れる感じ。

I 10の場面は、クラリネットじゃないかな。

N 10の場面、ドラムの「ダラララララ」って音も聴こえるよ!

本時の自分の学びをくり返す

A 8の場面で、平和な世界が消滅! 10の場面は、「大きすぎ」というイメージで、追いかける感じ。11の場面は、怖くて不気味。お葬式とか墓地のイメージ。12の場面は、猫と小鳥が歩いている? 仲良しになったのかな!

B 10の場面は音が速い。何か追ってきている? 11の場面ですんでしまったのはアヒルだと思う。天国に行ってしまった可哀想。10の動物は何だろう?

前時をふり返り、まずは音楽そのものを感じ取って聴くことを大切にしたい。いつも通り体を動かしてよいことを伝えるとともに、登場する動物を想起できるようにしたい。

それぞれが感じとったイメージや感情と登場する動物を表現する楽器の音色とを結びつけ、音楽をもとに想像をふくらませながら鑑賞した。タイムバーを活用することで、場面の移り変わりと音楽の構造とを理解できるようにした。

子ども自身が聴き深めたい部分をくり返し聴き深められるようにタブレット端末で操作できるようにした。楽器の音色を聴き取ることで、想像をふくらませたいようにした。

本時の学習で自分の考えや聴き方がどのように変わることができたかを振り返ることができると声をかけた。